

エロースと賛美

——プラトン『饗宴』における語りの形式について——

田中 一孝

『饗宴』篇におけるソクラテスは、彼が行おうとするエロースの賛美・賞賛(ἐγκώμιον, ἔπαινος)が、彼以前の5人の話者(パイドロス、パウサニ阿斯、エリュクシマコス、アリストパネス、アガトン)によって行われたそれと、全く異なるものになることを事前にことわっている。ソクラテスの演説が分量的に多く、哲学的に入り組んでいるため、あるいはそれがソクラテスの語りであるため¹、彼の演説を『饗宴』の頂点に我々は位置づけている。もっとも実際には、彼以前に行われたエロース賛美の話題と内容がソクラテスの演説に組み込まれており、この点においてソクラテスの演説は完全に独立的ではない。言い換えれば、プラトンは他の話者の演説を引き受けるものとしてソクラテスの議論を描いている。だがその引き受け方は批判的な場合と肯定的な場合とが複雑に入り混じっていて、ソクラテスと5人の話者の差異にどのように、どれだけの力点を置くのか、そしてそれぞれの話者がどのような役割を果たしているのかについては多様に解釈されている²。他方、ソクラテスの演説とアルキビアデスによるソクラテス賛美の関係をどう捉えるのかについても、同様の仕方で、相反する解釈が提示されている³。

ソクラテスと他の話者の関係についてこのように解釈が分かれてしまう大きな原因の一つは、リレー形式のエロース賛美というプラトンの対話篇の中でも

¹ Cf. Scott, 25.

² たとえば、ソクラテス以前の5人の話者は、喜劇詩人・医者などのある種のタイプを典型的にあらわしているとされ(Rowe, 9, cf.137), あるいは当時流布していた思想を代表するより具体的な個人に帰されることもある。Sheffield([2], 39)は、パイドロスはヒッピ阿斯やリュシ阿斯に、パウサニ阿斯はプロディコスに、エリュクシマコスはヒポクラテス、アリストパネスはもちろん彼自身、アガトンはゴルギアスにリンクされうることを指摘している。Cf. Bury, lii-lvii, Sheffield [1], 30 n.29.

³ Nussbaum(164-169)は、ソクラテスとアルキビアデスの演説には相互に排他的な欲望や知が描かれており、どちらを選択するかを読者は迫られるのであり、そしてこれがプラトンの戦略なのだと主張する。

対して Dover(164)は両者を補完的に理解する。ディオティマの理論に暗に示されていた徳性を、ソクラテスが実践していたことを示すために、アルキビアデスの演説は導入されたのだと彼は考える。また Scott はその実践を具体的に分析している。

特異な『饗宴』の構成・語り方にあると言ってよい。一部の箇所を除けば、ソクラテスは直接他の話者を問答によって吟味しない。それぞれの話者は、それぞれの仕方エロース賛美を完遂しているという意味では自律的であり、必ずしも合意を積み重ねることを目標としてはいない。『饗宴』が秩序だった統一的内容を持っていると理解しようとするならば、このことは端的な困難となるだろう。だがそもそも、エロースを取り上げるにあたって、プラトンはどうしてこのような作品の秩序を失わせかねない構成をあえて選択したのであろうか。本稿では賛美という活動それ自体がエロースの理解に積極的に寄与することを主張し、『饗宴』を統一的に理解する一つの可能性を提示したい。

1. Intertextual Web

まずは饗宴における演説・対話の一般的な特徴を確認することから、議論を始めよう。饗宴には基本的な体裁があつて(Stehle, 213-227)、小さい部屋に扉から入ると、三方の壁沿いにそれぞれ2つか3つの寝椅子が並べられ、その寝椅子には2人の人間が横になれるようになっている。必然的に空間と参加人数は限られることになり、饗宴を共に楽しむメンバーとは、基本的には政治的・市民的グループ、そして親しい友人同士となる。『饗宴』はアガトンが悲劇の競演で優勝したことを祝うために開かれた宴会の様子を描いているが、ここでの参加者もまた友人達同士である。こうした部屋の作りや参加者の性格に由来して、全ての人々は顔を突き合わせて親密なやり取りをすることになる。そして皆近い距離にいますので、こそこそしゃべるのは難しく、話題を全体で共有することになる。こうした状況において交わされる言葉や議論、詩などは次のような特徴を持つ。

順番に歌うこと、褒め称えること、問題を提議し、なぞかけに答えること、既知の歌における新たな変換などは、それぞれの人の貢献を強調しながらも、同時に、対話を集合的に保つために目論まれている。参加者達は常にお互いに応答しなければならないわけだが、その文学形式(謎かけと答え、歌と前の話者をしのぐこと、既知の歌に対抗するヴァリエント)は全体として二人以上の貢献者の働きを要求するのである。理想的な全体性を持った饗宴は一つの *intertextual web* を作り出すはずだと、言うことができよう(Stehle, 222)。

Stehle の以上の主張は、饗宴における対話一般を端的に説明したものとして

しばしば引用されるものであり、『饗宴』で繰り広げられるやりとりは、この説明に合致している。それぞれの参加者は、実際に自分以前に語られた内容や語り方に言及することによって、自らの優位性やオリジナリティを示そうとする。たとえば各話者の交代の仕方に注目してみると、パウサニアスはパイドロスがそう考えたようにエロースが一種類なのではなく、むしろ二種類あるのだと批判することから論じ始める(180c)。エリュクシマコス自分の番が回ってきた際、パウサニアスがエロースを二通りに分けたことを評価しつつも、エロースは人間の魂のみならず万物にあるのだと述べ、パウサニアスによる賛美の不十分さを指摘する(185e-186a)。そして話し終えたときには、アリストパネスに言い残したことを補完するか、別の仕方でも賛美するよう伝える(188d-e)。アリストパネスはエリュクシマコスの議論をからかってから(189a)、実際に彼とパウサニアスとは違った仕方でも話すことを宣言する(189c2-3)。アガトンはこれまでの人々の語り方を総括して、彼らがエロースではなく、むしろエロースが原因となるところの善いものゆえに、人間達を祝福しているのだと述べる(194e5-7)。だがまずはエロースがどのようなものであるかを述べた上で、その贈り物を語るのが適切な仕方だと主張する(195a1-5)。

このようにして、各話者は言わば作法として自分より前の話者に言及するのが通常であり、それによって自分がこの饗宴の話題を継承していることと、オリジナルな論点を持っていることをアピールして、他の話者との関係において自分の立ち位置を確認するのである⁴。むしろ賛美の最中においても、名指ししながら前の話を自らの議論に組み込むし、意識・無意識にこだわらなければ五人の話者の議論相互において非常に多くの言及・内容的な連関が見出せる⁵。そして興味深いことに、エロース賛美を終えた者は互いに争っていないながらも、自分より後に語る人々の演説に期待をかけている(193d-194a, 198a)。当然のことながら、後の人間による優れた賛美は、自分の演説を埋没させてしまうことになる。そのかぎりにおいて、各話者は自分の演説が犠牲になる可能性を許容してでも、饗宴を楽しもうとしているのである。あるいはこう言い換えることもできるだろう。彼らは自分の賛美が饗宴という場における対話全体の一部分に過ぎず、それだけでは対話が完結しないことを認めていると。もしそうだとすれば、一方でそれぞれ独自の仕方でもエロース賛美を語ろうとしているものの、

⁴ 有名なアリストパネスのしゃっくりもまた、彼以前の話者、パウサニアスに対する応答と解されることもある(Cf. Bury, xxii-xxiii. 他方、エリュクシマコスの演説との関連での解釈としては Corrigan and G.-Corrigan(62-68)。

⁵ Sheffield([2], 24-)。本稿では各話者の論点をつづさに調べ上げて比較する余裕はなく、話者相互の関係を特徴的に示唆する点を取り上げるにとどめる。

彼らはまさに濃密な *intertextual web* を構成していると言ってよいだろう。そしてこの個々の話者の集合体としての *intertextual web* が強調されるとき、対話篇の議論の全体性、すなわち統一的なエロース論を読み取ろうとする試みが正当化される。

ソクラテスもまた、5 人の話者と同じようにして、濃密な *intertextual web* を構成している。ソクラテスはまず手始めに、アガトンと問答をすることから始める。後に論じるように、彼は 5 人の話に不満をこぼしていたけれども、問答の冒頭ではむしろアガトンに敬意を表しながら、彼の語り方の善かった点 (cf.195a3-5) も認めている。

「そう、親愛なるアガトンよ、君は立派に話を始めたと思うんだ。まずはエロース自身がどのようなものであるかを示し、その後でエロースのなすことを示すべきだと語っていたのはね。その始め方にぼくはとても感嘆しているよ(199c3-4)」

こうして認めた点については、ソクラテスは自らのエロース賛美に積極的に組み込む。アガトンに対話から放免して、その代わりに、ディオティマとの対話を皆に語って聞かせる際には、アガトンの語りの方針を踏襲することをソクラテスは表明し(201d8-e2)、実際にそのように語っているのである。そしてこのソクラテスの話とアガトンの話の共通点は、単に(1)エロースがどのようなものであるか、(2)エロースがなすこと、という語りの順序・形式のみならず、語りの内容の中にも見出せる。実際に検討してみよう。

ソクラテスはディオティマとの会話を披露する前に、アガトンとエレンコス⁶的な対話を行いながら、いくつかの同意をとりつける。その同意の一つである、エロースは美しさへの恋である(201a2-10)ということは、そもそもアガトンが語っていたものであり(203b3-5)、それをソクラテスが彼に「思い出させ(201a3)」ている。この限りにおいて、部分的であれアガトンのエロース賛美は二人の問答に組み込まれている。さらに、アガトンとの対話から、ディオティマとのかつての対話の披露に移行する際、ソクラテスは次のように語っている。

「そこでぼくには、かつて異国の女性がぼくに質問しながら語ってくれたような、そのような仕方では語るのが最も容易だと思われる。というのも、別のものではあ

⁶ ここでの問答は、知者ディオティマのおかげもあって、行き詰まりに陥った後でもポジティブに議論が進行していく(201c, 204c)。その点でいわゆるエレンコスとは様相は異なる(Rowe, 168)。

るけれど、アガトンが今ぼくに向かって言ってくれたのとほとんど同じようなことを、ぼくもまた彼女に言っていたからだ。エロースは偉大な神であり、そして美しいものの一つであるとかね。そこで彼女は、ぼくがこの人(アガトン)を論駁したのと同じ議論によって、ぼくのことを論駁したのである。つまり、ぼくの説に基づくと、エロースは美しくも善くもないのだとね(201e2-e7)」

ここでは、エロースについてアガトンが語っていたものと、ディオティマにソクラテスが語ったものは、ほとんど同じであることが述べられている。エロースに関しては、かつてのソクラテスは今のアガトンと似た考えを持っていたのである。そして今、ソクラテスは、ディオティマが彼に対してそうしたように、エロースは美しくも善くもないとアガトンを反駁した。このアガトンとソクラテスの対話を前提として、ディオティマとソクラテスの対話は展開される。

〈ディオティマとの※筆者〉ストーリーのソクラテスは『饗宴』のアガトンと全く同じ前提(201E)を受け入れている。そしてディオティマは、当然アガトンによる賞賛を聞いていなかったのに⁷、アガトンによる同意や含意の上に自らの議論を成り立たせ、あるいは(機会があれば)それらを修正している(Stokes, 146)。

かつてのソクラテスとアガトンが同じ考えを持っていて同じような対話を展開していたのであれば、ソクラテスは、アガトンを論駁せずともディオティマとの対話をやや長めに話すことで、同じ内容のエロース賛美を一同に披露することができたはずだ。にもかかわらず、プラトンがあえてソクラテスとアガトンを問答させたのは(それもアガトンの意見を批判しつつ)、当然のことながら『饗宴』の展開上、ソクラテスのエロース賛美のために必要なものだからである。ソクラテスとアガトンの対話は、彼のエロース賛美と、ソクラテスのエロース賛美の楔としての役割を果たしているように思われるが、もしそうだとすれば、ソクラテスとアガトンのエロース賛美はどの点で異なっているのだろうか。そしてどうしてプ

⁷ アガトンやアリストパネス(205d10-205e5, 212c4-6)は『饗宴』内であからさまにディオティマの教説に取りこまれているが、彼らに関わらず、ソクラテスが前の話者について批判的に言及したり、議論を継承していると思われる箇所については、Bury(lviii-lx)やSheffield([1], ch.1, ch.7, [2], 24-28)がリスト化している。

ディオティマとソクラテスの対話は過去のことであるので、ディオティマの教説が5人の演説を踏まえていることは一見奇妙に思える。しかし二人は何度もエロースについて多くのことを語り合ったこと(207a5-6)、さらに次章で触れるように、ソクラテスは自分がエロース賛美をする際には彼が知っている真実を適宜配列すること(198d3-6)が記述されているので、彼は過去の記憶を語りながらも、5人に対して説得的な議論を展開していると考えことは十分に可能である。

ラトンはそうした異なったものを繋いだのか。

2. エロース賛美の仕方と目的

ソクラテスはアガトンとのみ問答をしているが、彼は 5 人を代表する立場として論駁されていると思われる。ソクラテスはアガトンが語り終えたあとに、5 人のエロース賛美の仕方をひとまとめにして強く批判し、自分のものとは全くことなるのだと宣言する。

「だが結局のところ、どうやら、何であれ美しく讃えるということは、そういうことではなくって、できるだけ偉大なことや美しいことを当のものに捧げることだったのだ。実際にそうであろうとなかろうとね。そしてそういった事柄が偽り(ψευδῆ)である場合、まあ、なんら問題なかったわけだ。だって、提案されたのはどうやら、我々の各人がエロースを賞賛していると思われるようにすることであって、実際に讃えているようにすることではなかったのだから(198d7-e4)」

ソクラテスはエロースを賛美する自分の番が回ってくると、以上のように困惑と不満を表明している。彼は他の人々と同様にエロースを賛美することに同意したけれども(177d6-e6, cf.198c6-d2)、ふたを開けてみると、彼以前に語った人々の話は、彼がそうあるべきだと思うところのエロース賛美とはかけ離れていたのである。

ではソクラテスの考えるしかるべき讃え方とは、どのようなものなのか。

「というのも、ぼくは愚かさから、讃えられるそれぞれのものについては真実(τἀλεθῆ)を語られねばならず、またこのことが基礎となり、その真実自体からもっとも美しいものを取り出して、できるだけ相応しい仕方 で配置しなければならぬと考えていたからだ(198d3-6)」

ソクラテスの語り方が 5 人と異なるポイントの一つとして、真実を語るということを彼は挙げている。そしていよいよエロース賛美をする段になると、再び彼は以前の話者の仕方ではなく、自分の仕方 で、真実を語るということを強調している(199a6-b2)。

アリストパネスが語り終えたとき、5 人の話の特徴について、ソクラテスは別の仕方でも示唆している。

「確かに君自身は立派に競った(ἡγώνισαι)わけだしね、エリュクシマコス。でも今ぼくがいる立場に君がなったら、いやおそらくむしろアガトンもうまく語った場合のぼくの立場になったとしたら、実際にいまぼくがそうであるように、君はたいそう恐れおののいて絶望するだろうよ(194a1-4)」

この発言もまた、アリストパネスまでの話と、次の話者であるアガトンの話が、ソクラテスにとっては一連のものであり、彼の困惑を深刻にさせる点から見れば、本質的に差異がないであろうことを予想している。5人は競争しながら、エロース賛美をしているのであり、饗宴の対話全体の中で互いをライバルだと考えて、熱心に美しい言葉を並べ立てようとしているのである⁸。上記のソクラテスによる冷やかしの後、ソクラテスとアガトンとのやり取りが続く(194a-c)。アガトンが先日大勢の観客の前で勇気と大胆さをもって立派に競ったわけだから、今回のようにわずかな人間の前でひるむわけではないとソクラテスは言う。これに対してアガトンは、ここにいる少数の思慮深い人間の前で語る方が、大勢の無思慮の人間の前で語るよりも恐ろしいというふうに返す。だが実際のアガトンは、詩的な技法を駆使してうまく語り、喝采を浴びるのであって、むしろこうした語り方を知らないソクラテスの方が、恥じ入って逃げ出したい気持ちになる(198a1-c1)。これは恐らく、アガトンがあたかも大衆の前でそうであったように、今回も恥じ入らずに語ったことを皮肉的に示唆しているのであろう⁹。というのも、アガトンの話によってエロースが可能なかぎり美しく、また善く見えてしまうのは、知っている人ではなく知らない人にとってであるから(198e6-199a2)。言うなれば、アガトンのエロース賛美の仕方は、彼が詩人として壇上で語る仕方と同じなのである。彼は面前にいる知者ではない人を楽しませ、彼らの気に入るようにエロースを語ったのであり、そしてその語り方は巧拙の差はあれど5人全員に共通する。彼らはそれぞれエロースに関して美しい言葉や表現を並び立て

⁸ アルキピアデスは皆と同様にエロース賛美するように求められた際、自分は酔っ払っているにも関わらず、しらふの人々と比較されるのはフェアじゃないと述べている(214c6-8)。アルキピアデスは他の人々のエロース賛美がどのようなものだったかを聞いてはいないので、主題を定めた饗宴の対話は、一般的に競争的な性格をもっていたことがうかがい知れる。

⁹ こうしたアガトンのエロース賛美の姿勢に対しては、プラトンによっておそらく注意が喚起されている。ソクラテスが「何か恥ずべきことをしていると思った場合、大勢の人々に対しては恥じ入らないね?(194c9-10)」とアガトンに尋ねたとき、パイドロスによって話をさえぎられる。もし対話が続いていて、彼が「恥じ入りはしない」と答えていたとすれば、観劇の際にそうであったようにソクラテス達は大勢の人々に属しているので(194c4-5)、アガトンはソクラテス達の前でさえも恥じ入ることはないということになるだろう。

ることによって、エロースを讃えているように思われる(198e4)ことを目指すのである。その限りにおいて、実際に真実を語り他の人々に説得を試みようとするソクラテスとは賛美の仕方が異なる。5人の話者達は競い合ってエロース賛美を披露していたが、ソクラテスには彼らと競い合う気は毛頭ないのである(199b1-2)。

こうした賛美という語りの形式はそれ自体で、その賛美の実際の内容がどうであれ、賛美する人間の目的を照らし出す。すなわち、5人のエロース賛美は観衆の評価を求めて、競争的なものになった。ソクラテスのエロース賛美の目的は、ディオティマとの対話を語り終えた後、それが神に愛され不死になることであると自ら表明している(212b1-8)。さらにアルキピアデスのソクラテス賛美についても言及すると、その目的はソクラテスによって喝破されている。すなわちそれは、ソクラテスとアガトンを仲たがいさせ、ソクラテスはただアガトンだけに恋し、アガトンはただアルキピアデスにだけ恋されるようにすることである(222c-d)。そしてこのようにして彼らが目的を持っているとき、彼らが得たいものが美しいものである限り、彼らはみな恋する者、エラスタイである。なぜなら、あらゆる創作の中でも詩作がポイエーシスと呼ばれ、またその担い手がポイエータイと呼ばれているように、欲望の特定の種がエロースと呼ばれているが、美しく善きものへの欲望は全てエロースであり、そして金儲け、体育の愛好、哲学などどんな形式であろうと、エロースに向かう人はエラスタイであるからである(205a-d)。饗宴の参加者達は、それぞれ目的が違うために賛美の仕方は異なり、その意味では自律的である。しかしいずれの場合も、彼らは賛美の目的に応じて何らかのエロースに向かっているのであり、エロースの様々な形式を体現しているのである。

3. エロースと哲学

リレー形式でつながれる饗宴的対話において、各話者が織り成す *intertextual web* は、彼らの議論の不可分性、緩やかな全体的統一性を読者に意識させる。他方で饗宴の参加者がそれぞれ独自の仕方でも語ることが、彼らの個人としての側面を強調してしまうがゆえに、全体を一つの議論として単純にまとめ上げるのを阻む。『饗宴』の構成はこうの一見矛盾する二つの側面を持っている。だが後者の個別性について、彼らが各々賛美を行うことが、実はエロースにとりつかれていることに由来しているとすれば、まさにその点において彼らをお互いに似た人々として捉え直すことができる。このことは

『饗宴』のエロース論の理解に次のように貢献すると主張したい。

3-1. ディオティマの教説における各話者の位置づけ

一般的にディオティマの教説は二つに区分される。すなわち恋する者が、一つの美しい肉体から二つの美しい肉体へ、さらに全ての肉体、営み、学び、美のアイデアの学びへと、導き手が強制力を働かせながら向かう最奥の秘儀(209e-212c)。そして最奥の秘儀の前のいわゆる低次の秘儀(201d-209e)においては、エロースの本性と出自、そしてエロースにとりつかれた恋する者が求めるものなどが語られている。全ての人間は不死性への願望から、自然本性において妊娠しており、美しいものにおいて出産しようとする。そして身体において身ごもっている人々は子どもを生むことによって、不死性を確保する。他方、魂において身ごもっている人々は、徳を生むことによって不死なる名声と記憶を得る。詩人は詩を、政治家は法を生むことによってこうした名声を博し、また発見者と呼ばれるような職人も具体例として挙げられている(209b5)。

Sheffield([1], esp. chap.4 and 7)はこうした恋する者に関する二つの記述を排他的な段階として区分した上で、最奥の秘儀に描かれているような人を DHM(Desiring Agent of Higher Mysteries)、低次の秘儀にある人を DLM(Desiring Agent of Lower Mysteries)として、同一の人が二つの秘儀に同時にあずかることはないと考えている。そしてソクラテスを DHMとして、彼以前の5人を DLMとして描く。Sheffield はディオティマの教説が DLM から DHM に移行したように、実際の対話も5人からソクラテスに移行しているという構造の類似を見出し、最奥の秘儀のためにそれまでの議論があったように、ソクラテスのエロース賛美のために5人のエロース賛美があると考え([1], 218)。

このように、『饗宴』の登場人物をソクラテスのエロース賛美の内部に位置づける解釈は、各話者をエラステースとして理解することによってはじめて可能になる¹⁰。Sheffield の解釈に対して、本稿がどういう立場をとるかについては次項において論じる。

¹⁰ 本稿もまた各話者をディオティマの教説につなげることを狙うが、賛美という語りの形式が、各話者がエラステースであることをよく示すことに注目した点で、Sheffield([1], chap. 7)にはない議論をしたと考える。基本的に彼女は、低次の秘儀において語られた内容と5人が描き出したエロースの内容の間で、重なっているように見える点を挙げることによって、5人をディオティマの教説におけるエラスタイだとする。

3-2. 哲学においてエロースが果たす役割

アルキピアデスは彼のソクラテス賛美において、自分の魂が哲学の様々な言葉に打たれて噛み付かれてしまったと白状する。そしてその言葉は素質の悪くない魂を捕まえたとき、何でもさせたり言わせたりすると述べ、次のように言う。

「そしてまたパイドロス、アガトン、エリュクシマコス、パウサニ阿斯、アリストデモスが見えるが、ソクラテスは言うまでもなく、他の人々もそうだ。つまり君たちはみんな哲学の狂気狂乱を共有しているのだ(218b1-b4)」

ソクラテスやアリストデモスはともかく、ここで言及されている人々は哲学を日々の営みとしていないはずである。にもかかわらず、彼らが哲学の狂気に与っているとすれば¹¹、まさにエロースにとりつかれていることによって、哲学に関わっているのではないだろうか¹²。というのも、ディオティマの最奥の秘儀に描かれているように、彼らはエロースにとりつかれているかぎり、「導き手が正しく導けば(210a6-7)」いずれ「惜しめない哲学の中で多くの美しい、壮大な言葉と思考を生み(d4-6)」、美のアイデアを見ることにつながりうるからである。最奥の秘儀において描かれている導かれる者は、恋の道を正しく進むように「強制(ἀναγκασθῆ, 210c3)」されなければならないとされるが、こうした強制力を行使することはソクラテスの日々の活動を思い起こさせる。ソクラテスはアルキピアデスに、自分が多くのものを欠いているのに、アテナイ人のこと、すなわち政治の仕事を行っていることに同意するよう「強制(ἀναγκάζει, 216a4)」している。そしてアルキピアデスは、ソクラテスの「命じる(κελεύει, 216b4, cf. 217a2)」ことに反論ができない¹³。ソクラテスはこの饗宴という場においても同様

¹¹ 宴の内容の報告者であるアポドロスは、彼の友人にこれから話すことが哲学についての話であることを述べている(173c2-5)。この点を一つとっても、ソクラテス以外の話者もまた、哲学とは何らかの仕方で無関係ではないと言えるであろう。

¹² Rowe(209)は全く反対に、アリストパネスなどがアリストデモスやソクラテスと同様に哲学の熱狂に関わっているのはおかしいと考えて、アルキピアデスがその「熱狂」を理解していないと考えている。

¹³ 饗宴に出席してその様子を伝えたアリストデモスもまた、ソクラテスの命令に従うような仕方、アガトン邸におもむいている(174b2, κελεύει)。さらに饗宴におけるエロース賛美を提案したのはエリュクシマコスであるが、その提案を決定付けるように、実際讀えるよう促したのはソクラテスである(178a1, ἐκέλευον)。そして何より、ソクラテスはエロースに関わることがらを重んじて修練し、他の人々にも推奨(212b7, παρακελεύομαι)している。

な振る舞いを取っている。宴が終わりに、ソクラテスはアガトンとアリストパネスに、悲劇と喜劇を作る知識は同じ人に属することに同意するよう強制している(223d3, *προσαναγκάζειν*, d6, *ἀναγκαζομένους*)。だが、このようにしてソクラテスが強制力を用いながら正しく導こうとしているにもかかわらず、アルキビアデスは彼のもとを離れると大衆の名誉に屈する(216b4-5)。そしてアガトンとアリストパネスはソクラテスにあまりついていけず居眠りし、ついには眠り込んでしまうのである(223d6-8)。

彼らがソクラテスによって哲学にあずかり、そしてたとえ最奥の秘儀のほとんど初期段階ではあっても、何らかの仕方では強制を受けて導かれているのだとすれば、Sheffield の言う DLM と DHM の排他的な区別は成り立たない¹⁴。エロースは誰にでもあり(205d)、そのかぎりでは誰でもエラステースであるが、彼らの自然本性は優れていて、かつ導き手によって正しく導かれようとするとき、いつでも最奥の秘儀を完遂する可能性はひらけている。エロースとは、多くの人々が哲学的活動に向かう素地を持っている証なのである。アガトンやアリストパネスやアルキビアデス、そして他の饗宴の参加者にも、最奥の秘儀にあずかる可能性は眠っている。かつてディオティマがソクラテスを論駁したのと同じように、ソクラテスがアガトンを論駁した。こうした論駁は確かにソクラテスと 5 人の話者の断絶を際立たせる。だがそれは同時に、ソクラテスがディオティマに説得されたように、彼らがソクラテスに説得されれば、まさにソクラテスのように哲学に向かい、エロースの秘儀にあずかりうるのだ。

ただ、彼らはソクラテスの導きについて行けず、正しく恋の道を歩もうとはしない。ソクラテスとしては、自分のみならず他の人もまた最奥の秘儀にあずかなければならないと確信しているし、そのためにエロースの真実を語るとい

¹⁴ 高橋(5-7, 10)は低次の秘儀において描かれている、身ごもっている人々の営みと、最奥の秘儀での対話的営みを、それぞれ非哲学的／哲学的という仕方では区別しており、Sheffield の秘儀の理解に近い仕方では解釈しているように思われる。Ionescu(29-34)は『メノン』における想起の過程と比較しながら、低次の秘儀と最奥の秘儀は同一線上にある異なった段階として理解しており、これも Sheffield の陣営のうちにあると言える。

他方 Gonzalez(10)は次のように Sheffield を批判している。すなわち、DLM と DHM を区別するテキストの根拠はなく、むしろ主体の区別として語られているのは、低次の秘儀での肉体において身ごもる人間と魂において身ごもる人間である。彼がコメントをしているように、同じ主体が低次の秘儀と最奥の秘儀にあずかるということを、あえて否定する根拠はない。二つの秘儀の基本的な違いについては、朴(390-396)の分析が適切であると思われる。すなわち、低次の秘儀は、人間の不死性への願望という恋現象の本質を説明し、最奥の秘儀は、意識的に目標達成を目指さなければならない正しい恋の行程を教示するものであって、基本的に彼はエロースに関してそれぞれ別の側面から議論が展開されていると考えている。言い換えれば、両者はそのそれぞれに関わる主体を区別できるような、排他的な内容を構成しているわけではない。

「賛美」の仕方では説得して、哲学的対話を続ける。

「まさに以上のことを、パイドロスに他のみんな、ディオティマは語り、ぼくの方は納得してしまった。そして納得してしまったので、人間の自然本性にとって、この所有(神に愛され不死になること)のためにエロースよりも優れた協力者を容易に得ることはないだろうと他の人々も説得しようとしているのだ。だからこそ、ぼくとしては全ての人(πάντα ἄνδρα)がエロースを重んじなければならないと主張し、ぼく自身はエロースに関することがらを重んじてとりわけ修練し、他の人々にも推奨し、今でもそうだがいつもエロースの力と勇気をできる限り賛美しているのである(212b1-8)」

おわりに

饗宴的対話は *intertextual web* を構成することによって、個々の話者を全体の一部として有機的な連関のうちに組み込む¹⁵。『饗宴』を読む場合、こうした構成はこの作品の何に貢献するのかが問題となる。本稿では、賛美という形式での語りが、各話者のエラステースとしての側面をあらわにすることを指摘し、これによって彼らの存在をディオティマのエロース論に取り込むことができるかと論じた。すなわち、各話者はエラステースである限り、もし彼らの魂が「美しく生まれよく自然本性が優れているのであれば(209b6)」¹⁶、最奥の秘儀を完遂する可能性を胚胎しており、ソクラテスはエロースの真実を明らかにして人々を説得するという彼なりのエロース賛美を行うことによって、アテナイの人々のみならず、まさに今、饗宴に参加する人々に対しても秘儀にあずか

¹⁵ 『饗宴』全体がより緊密な議論を構成しているかどうかは、各話者の賛美の内容や、その連関について具体的に分析する必要があるだろう。また本稿ではアルキ比亚デスについてほとんど触れることができなかったが、彼は自分以前の話者の賛美を聞いていないため、厳密に言えば *intertextual web* のうちにはいないかもしれない。そしてその厳密性をもってプラトンが‘web’の内外を区分していたとすれば、『饗宴』は途方もなく複雑な構成を持った作品だということになる。だがその場合でさえも、アルキ比亚デスはソクラテス賛美をしている以上、賛美という語りの形式それ自体は、「最低限」の仕方では『饗宴』の統一性に寄与するであろう(もっとも、Rowe(8)が考えるように、現実の饗宴と文芸における饗宴は異なるのだから、大雑把にはこの‘web’のうちにアルキ比亚デスも入れて考えてもよいかもしれない)。

¹⁶ 217e-218b ではソクラテスが発する哲学の様々な言葉が、「自然本性の悪くない(218a6)」若い魂を毒蛇のように捉えて咬み付き、何でもさせたり言わせたりするとアルキ比亚デスは熱っぽく語る。この「自然本性の悪くない」人間として、アルキ比亚デスは彼自身を含めた多くのソクラテスの対話相手を念頭に置いているだろう。

るよう促しているのである。

もっとも、正しい恋を実践しうる可能性は全ての人間に対して保証されているという理解は、『饗宴』の解釈において必ずしも目新しいものではない(e.g. Ionescu, 36-40)。ただ付言するとすれば、アガトンやアリストパネスなどの詩人、さらには弁論家やソフィストに比肩されうる人物までもが(註2参照)、哲学的な素質を備えた存在として哲学に向かうよう勧められているという点は、『饗宴』の持つ極度にプロトレプティックな性格を端的に示すものとして特記するに値するだろう¹⁷。

(京都大学・博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC)

文献表

- Bury, R. G., 1969(2nd ed.), *The Symposium of Plato*, Cambridge.
 Corrigan, K. and Glazov-Corrigan, E., 2004, *Plato's Dialectic at Play: Argument, Structure, and Myth in the Symposium*, University Park, PA.
 Dover, K. J., 1980, *Plato: Symposium*, Cambridge.
 Gonzalez, F., 2008, "Interrupted Dialogue, Recent Readings of the *Symposium*", *the Internet Journal of the International Plato Society*: <http://gramata.univ-paris1.fr/Plato/article77.html>.
 Halliwell, S., 1998(reprinted), *Plato: Republic 5*, Warminster.
 Ionescu, C., 2007, "The Transition from the Lower to the Higher Mysteries of Love in Plato's *Symposium*", *Dialogue*: 27-42.
 朴一功訳 2007年『プラトン 饗宴／パイドン』京都大学学術出版会。
 Rowe, C. J., 1998, *Plato: Symposium*, Oxford.
 Nussbaum, M., 1979, "The speech of Alcibiades: A reading of Plato's *Symposium*", *Philosophy and Literature* 3: 131-72.
 Sheffield, F. C. C. [1], 2006, *Plato's Symposium: The Ethics of Desire*, Oxford.

¹⁷ 『饗宴』の持つこうした性格は、『国家』における記述と対比的に捉えられるかもしれないが、実際には慎重に注意を払う必要がある。たしかに、『国家』では哲学的な素質を備えた人間は非常に少ないことが述べられているし(491a-b)、美そのものに至り、それを見ることになる哲学者と、「思わく愛好者(φιλοδόξους, 480a6. この語は恐らく、名誉愛好する人という意味もかけられている。Cf. Halliwell, 223)」は厳密に区分されている。そしてソフィストは、素質ある人間を墮落させる大衆に迎合する者として描かれ(493c-d)、X巻では詩人が追放されている。こうした記述は全て、ソフィストや詩人と哲学者の間にある埋めがたい溝を感じさせるが、他方、理想国家建設や哲人王の育成という文脈の中に位置づけられるものであるので、現在する詩人やソフィスト達は哲学に全くもって無縁であるという性急な主張には決してつながらない。むしろ詩人など含んだより一般的な人々が『国家』の読者層として想定されていたとすれば(Cf. Yunis, 10)、多くの人々のためのプラトンの一貫した「哲学のすすめ」を読み取ることができる。

———[2], 2007, "The Role of the Earlier Speeches in the *Symposium*: Plato's Endoxic Method?", in *Plato's Symposium: Issues in Interpretation and Reception* ed. by Lesher J., Nails D. and Sheffield F., Harvard: 23-46.

Scott, D., 2000, "Socrates and Alcibiades in the *Symposium*", *Hermathena* 168: 25-37.

Stehle, E., 1997, *Performance and Gender in Ancient Greece: Non Dramatic Poetry in Its Setting*, Princeton.

Stokes, M. C., 1986, *Plato's Socratic Conversations: Drama and Dialectic in Three Dialogues*, Baltimore.

高橋雅人 2009 年「ソクラテスと美のイデアへの上昇」『古代哲学研究』41: 1-14。

Yunis, H., 2007, "The Protreptic Rhetoric of the *Republic*", in *The Cambridge Companion to Plato's Republic* ed. by G. R. F. Ferrari: 1-26.

付記 本稿は「平成21年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果」の一部である。